

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 謝 平

論 文 題 目

現代中国語の程度表現に関する研究

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	丸尾誠
委 員	名古屋大学教授	柳沢民雄
委 員	名古屋大学教授	楊曉文

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、現代中国語の程度表現の諸相について考察したものである。中国語の程度表現には、“很高兴”[とてもうれしい]のように程度副詞を述詞の前に置く「程度状語を用いるタイプ」と、“高兴得很”[とてもうれしい]のように後ろから修飾する「程度補語を用いるタイプ」が存在する。この二種類の程度表現については、個別にはこれまでも多く研究されてきたものの、両者を体系的に関連付けて、その使い分けに詳細に言及したものは決して多くはない。また、程度状語と程度補語という2つの成分に該当する範囲についても、統一した見解には至っていない。本論文では程度表現の枠組みを定めた上で、意味論および統語論の観点から各類に属する個別の語句の用法分析を通して、中国語における程度表現の体系の構築が企図されている。以下、論文の概要と評価について述べる。

### [本論文の概要]

本論文は全5章から成り、これに研究の目的と意義および各章の構成を述べた序章と、まとめの終章が加わる。

第1章では、本研究の枠組みとなる「程度表現」について、統語的側面と意味的側面からその定義付けがなされた上で、程度状語・程度補語と各種成分の間にそれぞれ見られる共起制限の問題について、考察が行われている。その結果、程度状語および程度補語は性質形容詞、心理動詞と共起するだけでなく、一部の名詞や非動作動詞フレーズとも共起が可能であり、また、ほとんどの程度表現が“比起”構文（比起 B, A～[B と比べて A は～]）とは共起することができるものの、一部の表現については“比”構文（A 比 B～[A は B より～]）と共起することができないという特徴が述べられている。

そうした事実をもとに、現代中国語の程度表現が「対象の程度を表すもの」【A 類程度表現】と「対象と参照点の程度差を表すもの」【B 類程度表現】に下位分類され、以下の章では、この区分に基づいて考察が行われている。

### 【A 類程度表現】

程度状語：“有点、挺、很、相当、非常”など

程度補語：“极、透、很、要命、不得了”など

### 【B 類程度表現】

程度状語：“更、还、最、比较”など

程度補語：“多、远、一点、几倍”など

対象の程度に焦点が置かれる A 類程度状語については、低い程度を表す“有点、有些”などと、高い程度を表す“很、挺、相当、非常”などに区分できる。従来の先行研究では、“有点”は通常マイナスの意味を表す語と共起すると指摘されてきた。しかし、実際には“有点喜欢他”[彼のことがちょっと好きだ]のような中性的な意味の語に限られず、プラスの意味の語とも共起するケースが多く見られる。第2章では参照点という概念に着目し、この参照点が想起できる場合には中性・プラスの意味の語と共起することが可能であることを論証している。

また、同じく程度を表す“很”については、程度状語として用いられる場合と程度補語と

## 論文審査の結果の要旨

して用いられる場合（例：很好—好得很〔（ともに）とてもよい〕）をそれぞれ取り上げ、その用法の考察を通して、程度状語“很”が用いられた場合には、それが修飾する述詞部分の表す性質そのものが問題となっており、一方、補語としての“很”は已然の状態に対して自分の意見や評価を強く主張するニュアンスを帯びるものであることを明らかにしている。その上で、程度状語“很”は「叙述的」であり、程度補語“很”は「強意的」と結論付けている。

第3章では、A類程度補語について、補語を導く“得”を伴う表現と伴わない表現の二種類を取り上げ、それぞれの意味機能と文法機能を明らかにしている。“得”を伴う表現については、“很、要命、要死、不得了”などが程度補語として認められているが、“难受得快要死了”[辛くて死にそうだ]の“快要死了”のようなフレーズが程度補語に該当するか否かについては、従来より意見が分かれている。本章ではこのような“得”に後置する補語が比較的長いフレーズから成る（従来は状態・様態補語の枠で捉えられる）ものを周辺的な程度補語と捉えた上で、“得”を伴う補語を下位分類しつつ、それぞれの文法的特徴と意味的特徴について分析している。一方、“得”を伴わない補語としては、“极、死、坏、透、疯…”などが挙げられるものの、これらの表現は、次のようにすべてが同一の形容詞と共起することができるわけではない（？はその表現が不自然、\*は不成立であることを表す）。

「非常にかっこいい」の意味

帅极了、？帅死了、\*帅坏了、\*帅透了、\*帅疯了

本章では、これらの中でもとりわけ使用頻度の高い表現である“极”と“死”を取り上げ、その原義と程度表現としての機能の間にどのような関係があるのかについて分析した上で、形容詞と補語の共起制限の問題について論じている。その結果、“极”は元々中性の意味を持ち、共起範囲が広いのに対し、“死”については、その「死ぬ」という原義のもたらしイメージからマイナスの意味の形容詞と共起する傾向があることを、人称制限の問題にも言及しつつ実証している。

第4章では、“比”構文で用いられる副詞“更”と“还”、および“比”構文では用いられない副詞“比较”を取り上げて、それぞれの意味機能と用法を明らかにしている。“更”および“还”は、どちらも「さらに」という累加の意味を表すこともあり、互いに置き換えられる場合が少なくない。しかし、“还”は程度差を表す補語“多”や数量補語などと共起することができるのに対し、“更”については“\*更长多了”、“\*更高三厘米”のように使用できないケースも見られる。こうした事象に基づいて、“更”の表す「確信的」というニュアンス、“还”の表す「逆説的」というニュアンスに着目し、「程度差」および「参照点」との関係から、両者の“比”構文に対する「依存」の度合いについて考察している。その結果、“更”は「程度差が著しい」ことを表すのに対し、“还”は「参照点よりも程度が高い」という参照点に注目したものであることを明らかにしている。

一方、“比较”については“比”構文では用いられないものの、比較対象が提示される場合に用いられるケースが少なくない。B類程度状語は比較対象が存在する場面に用いられ、比較対象と照らし合わせる「相対性」を有しているといえる。しかし、“比较”は比較対象が提示されない場合にも用いられ、B類程度状語に共通する「相対性」以外の特徴も有して

## 論文審査の結果の要旨

いると考えられる。第4章の後半部分では「相対性」以外のニュアンスに着目し、“比较”の意味特徴の解明を試み、その結果、“比较”は「相対性」以外にも、「どちらかといえば対象の程度のほうが高い」という「弁別的」なニュアンスを含むことを明らかにしている。

第5章では、B類程度補語の典型例である“多”を用いた表現と“一点”を用いた表現を取り上げ、それぞれの意味機能と文法機能が考察されている。「程度差が大きい」ことを表す“多”が用いられた表現には“P+多+了”、“P+得+多”、“P+程度副詞+多”(Pは述詞)などのタイプが見られ、本章では「共時的比較」および「通時的比較」という視点から、各タイプの用法が分析されている。“P+多+了”については、末尾に「変化」あるいは「感嘆」の語気を表す“了”が用いられていることにより、「共時的比較」に加えて「通時的比較」を表すことも可能であり、文脈によって「以前より程度差が大きくなった」という意味を表す場合もあれば、「主体と参照点の間の程度差が大きいことに対しての驚嘆の語気」を表す場合もあると述べている。一方、“了”がない表現“P+得+多”と“P+很+多”は表現自体が「変化」あるいは「感嘆」の語気を表すものではないため、「共時的比較」を表す傾向があり、程度差が大きいことを客観的に述べようとするニュアンスが読み取れるとしている。

「程度差が少ない」ことを表す“一点”が用いられた表現には、主に“P+一点”と“P+了+一点”の2つのタイプがある。第5章の後半部分では“有点+P”との比較を通して、プラス・中性・マイナスの意味をそれぞれ表す述詞との共起関係を考慮に入れつつ、「不満」「不如意」といったニュアンスが含意されるか否かに着目して、“P+一点”と“P+了+一点”の意味用法を分析している。考察の結果、“P+一点”はあくまでも「程度差が少しである」ことを表すのに対し、“P+了+一点”の表す意味はPに依存するものであるとしている。すなわちPが中性・プラスの意味の語である場合、“P+了+一点”は「程度差が少し見られるようになった」という変化の意味を表す傾向があるのに対し、Pがマイナスの意味の語である場合、「ちょっと基準から超えてしまった」「ちょっと～すぎる」といった「残念あるいは不満な気持ち」を表すことになるというものである。

以上の考察を踏まえて、終章では「程度表現」の新たな枠組みが提示され、本論文のキーワードの1つである「参照点」と程度表現の分類との関係についてまとめた上で、現代中国語における程度表現の体系が示されている。

### [本論文の評価]

本論文は、状語あるいは補語の形式を用いて表される現代中国語の程度表現について、それぞれの表現意図の相違を分析するとともに、各形式における個別の語句の用法について考察したものである。本編では、「“有点儿”と結び付く形容詞の性質」「『形容詞』+“极了”の“了”の文法的性質」「比較構文における“还”と“更”の使い分け」「述詞と程度補語の組み合わせの相性」といった興味深い問題を中心に扱われている。こうした問題は従来より個別に研究されてきたものの、本研究では博士論文の分量という特性を生かして、相互の文法事象の分析につながりを持たせている。

論者自身も述べているように、中国語の各種補語の区分については、揺れが見られる。と

## 論文審査の結果の要旨

りわけ程度補語については状態補語・様態補語との重なりから、明確な線引きをするのは容易ではない。本論文では主に意味的な根拠に基づき、本来であれば様態補語に区分されるようなものも含めて程度補語と見なして考察の対象としている。本研究の扱う「程度」という概念自体が多分に意味的な要素に依存するものではあるものの、中国語の程度表現の体系の構築を目指す以上、より客観的かつ厳密な分類基準を設定することに、もう少し尽力すべきではなかったかという印象を拭いきれない。

程度補語と形容詞の共起制限の問題など、インフォーマントによって容認度に差が見られることもあって規則化が容易ではない現象を扱うが故に、より客観的な分析を目指して、大量の実例を用いて実証的に論証しようとする姿勢は評価に値する。しかしながら、主な考察の対象となっている個別の程度補語が比較的メジャーなものに限られていることに加え、論者の目指す新たな中国語の程度表現の体系が、従来の枠組みを覆すような画期的なものであるとはやはり言い難い。また、丁寧に記述しようとするあまり、既に先行研究で言及されている事柄について必要以上に詳述しており、その結果、論の展開が遅く感じられ、全体的に冗漫な印象を与えているといった不備が審査員から指摘された。

こうした問題点は見られるものの、本論文は程度表現に関する一連の問題を相互にリンクさせつつ網羅的に論じたものであり、その議論の過程は、文法書類で問題を抱えたまま通用している現行の記述に一石を投じるものだといえる。例えば、程度補語“极”類の直後に置かれる“了”の分析は、比較の差を表す“多了”が通時的・共時的いずれの意味で使われるかという問題とリンクする。このタイプの補語については“了”まで含めて補語と見なすか否か見解が統一されていないのが現状であり、既存のテキストや参考書類ではそのピンインを“jí le”のようにくっつけて表記したものと“jí le”のように分けて表記したものが混在している。本研究における“了”の表す文法的意味に対する分析結果は、そうした問題に対する解決の糸口ともなりうるものである。その他、各種言語事象に対する本研究成果は程度補語・状態補語に関する新たな中国語教授法の確立に貢献しうるものであるという点で高く評価された。

以上の評価に基づき、審査委員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。